

戦争を知らない世代へ ⑦ 香川編

「たかまつ7月4日」
—空襲と暮らしの記録—

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ⑦香川編

「たかまつ7月4日」
— 空襲と暮らしの記録 —

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ⑦

たかまつ 7月4日—空襲と暮らしの記録

昭和50年7月4日 初版第1刷発行

編者 創価学会青年部反戦出版委員会

発行者 山崎善智

発行所 株式会社 第三文明社

郵便番号 101 東京都千代田区猿樂町2-5-4

電話 東京(294)8731(代) 振替口座 東京117823

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 株式会社 星共社

©1975 printed in Japan 0036-7007-4438

はじめに

あの日、昭和二十年七月四日末明、私たちの郷土、讃岐・高松は、降りそぐ焼夷弾により、猛炎の町と化した。それは、当時、坂出市に住んでいた六歳の私にとっては、東の空をおおっている雲が明るみ始め、やがて夜空一面、夕焼けの如く、真っ赤に染まったというただそれだけの記憶しか残っていない。しかし、あの空の下は、凄惨な地獄絵だった。家財を焼かれ、親を失い、子を失い、大事な人を失った慟哭が、焦土に空しく消えていったのであった。

高松市戦災復興誌によると、西方から飛来した約九十機のB29によって、市街地の八十パーセントが焼失し、罹災者は八万（当時、人口十二万）死者は九百二十七人に及んだ、とある。しかし、その死者の数は、高松市戦災犠牲者遺族会の調べでは千三百十六人（一説には千三百十三人）のほり、未だに正確な数は、はっきりしないという。

飢餓を知らない者には、飢えの何たるかはわからないのと同じように、戦争の真実の恐ろしさは、肌で感じた者にしかわからないであろう。

香川に住む私たちは何よりも、この心豊かなふるさとを誇りにしている。今こそ、戦争のいま

わしさを掘り起こし、語り継いで一人一人の生命の中に反戦平和のトリデを築かない限り、我が郷土の明日はない。——その熱情は、昨年八月、「香川反戦平和集会」を開くに至り、席上、大会宣言の一項で空襲三十周年を期して「戦争体験集」を出版することを決議。以来地道ではあるが、着実に、平和への波動を高めてきたのである。

今ここに、その結晶が一冊の本として発刊の運びとなったことは、喜びにたえない。本書に収録された、悲痛な『原体験』は、単なる戦争の記録というだけにとどまらず、いかなる平和論もこえる真実の叫びである。編集の労にたずさわった「香川県反戦出版委員会」のメンバーに、心から敬意を表するものである。

無残にも尊い生命を失った犠牲者の冥福を祈りつつ、本書が、永く広く読み継がれ人間郷・香川建設への強じんなバネになっていくことを願ってやまない。

昭和五十年六月

創価学会香川県青年部長

寒川 泰博

はじめに 1

I 炎の慟哭

極言のあさましき……………	市原ヒサエ	10
絶対忘れられんものや……………	横山 富子	15
正直者がバカをみる……………	大西 弥吉	20
眼鏡を残して死んだ妹……………	松山千代子	26
他人の遺骨をもらっても……………	奥村 さだ	31
折り箱の位牌……………	玉井コギヌ	36
突然の空襲……………	松本 芳江	40
焼夷弾に奪われた私の娘……………	片山のぶえ	45
赤鬼のような焼死体……………	木内 文子	49
辛かった疎開生活……………	川本 菊江	55
勲章など何になろう……………	多田 澄子	60
夫に続いて死んだ娘……………	高木シゲ子	64

Ⅱ 幼な子の残像

我が子への手記……………小西百々代 72

切れぎれの記憶……………高橋 秀毅 78

私のうちなる戦後……………久保 紘章 82

両親との対面に一週間……………青木 昌司 88

焦土の中を右往左往……………栗原美代子 93

水蜜桃の初夏に……………長柄サヨ子 97

浅い眠りの夜に……………成岡 幸子 102

傷痕は今なお深く……………一新 栄子 106

予告ビラの空襲……………刑部 嘉一 111

空襲後の暗い空……………玉越 栄治 118

焦燥の記憶……………高島 文子 122

Ⅲ 空白の青春

箱入り娘から苦勞のどん底へ……………白石 光子 128

結婚・空襲・竹のこ生活	中津 繁雄	133
灰の中の嫁入道具	山室 房子	139
茶褐色の太陽	川根 啓子	142
立ちつくす朝	三好三代子	146
病の父とさまよった焦土	横井 清子	150
灰色の青春	石渕 文子	154
過労に没した父	佐々木熙子	159
罹災者というレッテル	碓石 完一	166
戦争で破壊された家庭	秋山すみ子	170
戦争が奪った肉親	宮崎伊勢子	175

IV 焦土に生きて

辛苦を味わった親子	山下 ヒデ	182
戦中戦後と続いた苦勞	樫原 香澄	188
背中の赤子も忘れて	山本 静枝	194
死と飢えと怒りの戦争	岡本 秀雄	198

焼け跡に子供を捜す……………山田 久栄 203

劫火の中茫然と立ちつくす……………梶川 正雄 208

心の傷痕は深く……………渡辺 スミ 213

見知らぬ人の一言に命を拾う……………山本 照子 218

V 三十年―点と線

赤い灯が点った……………河口 理正 222

焼夷弾で死んでも……………飯間 浅吉 234

生き残った者の義務……………喜田 清 238

高松空襲前後史 248

あとがき 252

たかまつ

7月4日

——空襲と暮らしの記録

This map illustrates the geographical distribution of disaster zones within Matsuyama City and its surrounding areas. Key features include:

- Legend:** A shaded rectangular box labeled "罹災区域" (Disaster Area) is positioned at the bottom left.
- Geographical Labels:**
 - Top: 高松港 (Takamatsu Port), 大の場 (Onomachi).
 - Left: 西浜港 (Seihin Port).
 - Center: 市十字 (City Cross), 高松商會 (Takamatsu Chamber of Commerce).
 - Right: 香川郡 (Sagami District), 太田村 (Ota Village).
 - Bottom Left: 鷺田村 (Rumida Village).
- Infrastructure and Landmarks:**
 - Rivers: 宇治川 (Uzura River), 堀江川 (Horiegawa River).
 - Bridges: 丸亀大橋 (Marugame Daibashi).
 - Buildings: 正興 (Masakage), 警察署 (Police Station), 郵便局 (Post Office), 倉敷結核病舎 (Kure Tuberculosis Sanatorium), 高松小中学校 (Takamatsu Elementary and Junior High School), 高松南小学校 (Takamatsu Minami Elementary School), 高松北小学校 (Takamatsu Kita Elementary School), 高松南中学校 (Takamatsu Minami Junior High School), 高松北中学校 (Takamatsu Kita Junior High School).
- Map Features:** The map uses solid lines for roads and dashed lines for boundaries or other administrative divisions. Shaded areas are concentrated in several specific locations, primarily along the coast and in certain urban centers.

I

炎の慟哭

極限のあさましき



いちはら
市原ヒサエ

(当時18歳明善高女2年
中野町261住)

あのころは毎日、毎日、すきっ腹をかかえて林の飛行場で、勤労奉仕に明け暮れていた。まるで牛や馬のように車に乗せられて通い、一日中、芝植えだった。

夜になると毎夜のごとく、九時半ごろに空襲警報が発令され、しばらくすると解除になっていた。私たちはそれを『定期便』と呼んでいた。あの夜も、例のごとく解除されたので『定期便』だと思った。しかし、意外にも、その直後にB29はやってきた。脊椎カリエスで足の悪い姉は、町内の老人や身障者と一緒に、警報発令とともに、西方寺方面に避難していたが、解除になって帰ってきていたので、逃げるのに苦労が倍加する結果となった。「今夜は、もう来ない。蚊帳をつって早く寝よう」と、床についたとたん、バツ、とあたり一面が明るくなった。後で聞いた話だが、B29は先に照明弾を投下、その後、焼夷弾を投下したとのことである。

とうとう高松まできたか、と転倒した気持ちをとおり直し、貯金通帳や印鑑等を、あらかじめ詰めていたカバンを背負い、姉と妹とともに表へ飛び出した。すさまじい音とともに、すでに、そ

こここで火の手があがっている。上空では無数の焼夷弾が炸烈している。火の雨とはこのことかと、一瞬、幼いころ見た地獄の絵本を思い出した。恐る恐る上を見ると、旋回している飛行機の翼が、燃える火勢の反射で真っ赤に見えたのを今でも、ありありと思い出す。

一緒に飛び出したはずの妹が、どこへ行ったのか、わからない。兄は、蚊帳や日用品を自転車に積み一目散。この高松より数日早く岡山で罹災したために、身を寄せていた父の姉妹が経験者のカンからか、早くもどちらかへ逃げていた。父だけ連れて、我先に逃げた叔母たちが憎らしい。父も父だ。無性に腹が立った。狭い道路は、人であふれんばかり。親も兄弟もない。ただ自分の安全、無事だけを願って、夢中で逃げ回っている。

焼夷弾は次から次へと落ちて来てる。直撃されればいちころである。二足重ねてはいている靴の下から熱気が伝わってくる。両側の家から火の手が次々と上がる。障子が一番先に燃えている。当時、私の家は栗林公園北門から電車通りを北へ、八幡通りに近い東側の裏路地を隔てた、民家の密集した場所にあった。後日聞くと、そこが最も死者の多かったところだという。

比較的広い電車通りを、公園へと人々は逃げて行く。また、西の稲荷山の方へも無数の人が殺倒している。病気の姉と夢中で山の方へと足を運ぶが、よく夢の中で、逃げてもなかなか歩かず、もがき、寝汗をかくと同じように、足が前に動かない。

バーンッ、という炸烈の音。そのたびに胸が圧迫されて、気絶寸前。袋攻めに遭ったようなも

のである。まだ燃えていない家に飛び込んで、また飛び出していく。防空壕へ入った。そこには臨月の若い母親がいた。産気づいていた。しかし、ほどなく、その人は出て行った。私と姉も危険を感じ、しばらくして外へ。私は、アッと息をのんだ。さきほどの妊婦が倒れていた。胎児が血液とともに飛び出し真っ赤に焼けて、まるで、ゆでダコのようなだった。この世のものとは思われぬ地獄絵である。

火の雨の中を逃げる。ただただ生きたいと願った。姉も必死でついてくる。ずいぶん走ったように思うのだが、わずかしか走っていない。B 29は去るところか、ますます焼夷弾の数は増しているようである。もう、一面どちらを向いても燃え上がっている。前を見ると、おばあさんが、中風を病んでいるのだろうか、おじいさんを籐椅子（とうし）に乗せて、押していた。が、もうこれまでといわんばかりに、主人を捨て自分だけ後も見ずに走り出した。おじいさんは「アワワ……」と、泣いて叫んだが、極限に立たされた人間のあさましい姿――。近くで、また爆弾が落ちたのである。大音響とともにすさまじい熱風が巻き起こった。おじいさんの姿は見えなかった。

子供を抱いた母親が倒れた。子供はボロ布のように肉片が散り、即死。母親も立ったままで絶命したのだろうか。じっとしていたが木が倒れるように崩れた。二目と見られない凄惨な、阿鼻叫喚である。目の前で走っている女の子の背負っている荷物が燃えている。しかし、その子は気づかず、走り続けている。よく見ると、離ればなれになっていた妹ではないか。急いで消してや

る。小さな体が震えている。可哀想に、なぜこんなに苦しまなければならないのか。日本は神国ではなかったのか。これでも勝つのだろうか。不満と不安が胸を痛くする。

道端の川へ逃れた。目の前の二階建ての家が火の海。燃えさかる二階の障子の向こうに逃げ遅れた影が、二つ、三つ。炎のなかで手を上に伸ばすその影は、幽霊を見るかのようなだった。恐しくて、見るにしのびず、その場からはい上がり、走り続けた。

だんだん死体が増えてゆく。踏まないように用心しながら走るのも難しい。もう、これまでと覚悟を決め、近くにあった製紙の廃液を流すドブ川に飛び込んだ。すでに多くの人がひしめいている。拾ったバケツを頭にかぶり、飛行機が上空を通過するたびにしゃがんだ。日ごろは悪臭を放つヘドロの堆積した川である。少しでも山側へ近い方へ、と思いヘドロに足をとられながら対岸へ進んだ。やっと岸辺の柳の下にたどりつく。ちょうど、上空からは見えないにちがいない。

口元まで水につかつてはやりすぎず。亀がモンベをかみ、足をつつく。こんな所に亀がいたのか——。つい先ほどまでいた道に、また爆弾が落ちた。大勢の人が死んだようだ。

地獄のような夜が明けた。太陽の光は無気味な暗黄色である。B 29は去った。川からはい上がると、姉は悲痛な声で「足をしばって！」と、呻く。驚いたことに悪い方の右足の、もものつけ根に穴があいてしまっている。夢中でモンベを裂き、傷の上をしばる。泥だらけの布である。私自身も、服はなんともないのに胸一面が火傷である。あれだけの熱風の中を逃げ通したのだから

ら、無理もなかった。

さきほどの直撃の跡は、大きな穴があき、三十人ほどの人が、みな青白い顔でベタツと座りこんでいる。死んでいるのだ。回りでは半死半生の人が「ウォー」と動物のような呻き声を出しては血を吐いている。

姉は、苦しいのだろう、呻き嘆き続けている。何時間たっただろうか。遂に、苦しみ通して死んだ。悲惨な死である。涙もでない。救護班がこもをかぶせ、どこかへ運んだ。それきりである。永久の別れとなった。遺骨もない。

そのうちに兄と出逢った。妹と栗林公園へ行くと、幸いにも父と叔母たちがいた。木々はくすぶり続け、そこかしこは負傷者の山。死体にはゴマをふったように、シラミがたかっている。臭気の中を、香西の親類を頼って行った。

一日がかりの買い出し。イモに大根に、そしてイナゴも、われた瓦の上で炒った。一ヶ月後には、焼け跡にバラックを建て、畑を開墾。苦痛の日々は、その後、何年も続いた。

私は、もう二度と戦争を体験したくない。それだけを思う。七月四日。高松空襲は、一生忘れることのできない暗い暗い記録である。